

## 盆前出荷用極早生水稲品種「なつのたより」の栽培法

船場 貢・西村勝久・泉 省吾 (長崎県総合農林試験場)

## Mitsugu FUNABA, Katsuhisa NISHIMURA and Syogo IZUMI : Cultivation Method of Rice Cultivar "Natsunotayori" in Early Season Culture

なつのとよりは、1992年長崎県の認定品種に採用され、1993年から盆前出荷用品種として普及が図られている。しかし、なつのとよりはコシヒカリより収量が10%程度低いので、主としてコシヒカリ並みの収量確保を目的として、栽植密度、施肥法、および刈取時期について検討した。

## 1. 材料および方法

試験は1992年から3か年、場内水田においてなつのとよを用い、移植日を4月15日、16日として実施した。

1) 栽植密度と植付本数については稚苗、中苗を用いて22.2, 25.6, 30.3株/m<sup>2</sup>、3本および6本植えで試験した。2) 施肥法は第1表に示したとおりで、比較にコシヒカリを用いて中苗で検討した。3) 穂肥時期試験は穂肥の時期を出穂前30日、25日、20日、15日とした。4) 刈取時期試験は成熟期前11日から成熟期後5日まで2~4日おきに刈り取りを行い調査した。

## 2. 結果および考察

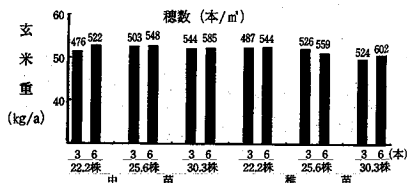
## 1) 栽植密度、植付本数

密植になるほど中苗、稚苗とも m<sup>2</sup> 当たり穂数は増加した。m<sup>2</sup> 当たり籾数は中苗で増加したが、稚苗では一定の傾向は認められなかった。玄米重は中苗では区間差がほとんどがなかったが、稚苗では30.3株になると低下した。植付本数では中苗、稚苗ともいずれの栽植密度でも、6本植は3本植に比べて、穂数は明らかに増加したものの、m<sup>2</sup> 当たり籾数は必ずしも増加せず、玄米重にもほとんど差がなかった。

以上の結果から、栽植密度は22.2~25.6株、一株植付本数は3~6本が良いと判断された。

## 2) 施肥法

施肥量が多くなるほど、穂数は増加し、m<sup>2</sup> 当たり籾数は5-2-3区から3万粒を越え、玄米重は52.2kgでコ



第1図 苗量・株数・植付本数と玄米重 (1992, 1993年)

第1表 施肥量と生育・収量 (1993, 1994年)

品種	区名	成熟期 (月日)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	籾数 (本/m <sup>2</sup> )	千粒重 (g)	玄米重 (kg/a)	検査等級 (1-9)	倒伏程度 (0-5)	
なつのとより	3-0-3	8.3	420	252	90.1	20.2	46.0	3.0	0.5
	3-2-3	8.4	436	262	91.1	20.1	46.9	2.3	0.9
	5-0-3	8.4	459	280	91.3	19.8	48.8	2.8	1.3
	5-2-3	8.5	471	304	89.3	19.8	52.2	2.8	1.4
	7-0-3	8.5	512	321	91.4	19.8	56.7	2.5	1.4
	7-2-3	8.6	507	324	91.7	19.2	57.4	2.8	1.7
	コシ	3-2-3	8.14	392	290	86.7	20.6	49.6	6.3

注) a) 区名の数字は基肥・中間追肥・穂肥の総施肥量 (kg/10a) を示す。  
b) 検査等級は1・1等上~5・2等中~9・3等下

シヒカリより多収となった。基肥+中間追肥量はコシヒカリより40%多い7kg/10aが適当であり、その際中間追肥を省いて全量基肥が良いと判断された。しかしながら施肥量が多くなると、倒伏程度がやや大きくなり、成熟期もやや遅くなるので、その点は留意しなければならない。

## 3) 穂肥時期

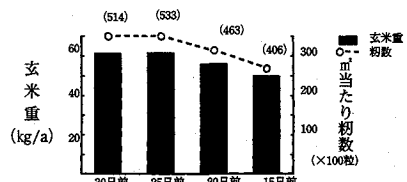
コシヒカリは耐倒伏性が弱いので、穂肥は出穂前15~18日に施用しているが、なつのとよりは倒伏に強いので、穂肥の時期を早めた場合の効果を検討した。

出穂前20日、15日の穂肥では穂数は減少し、m<sup>2</sup> 当たり籾数はそれぞれ3万1千粒、2万7千粒と減少し、玄米重は低下した。出穂前30日および25日の穂肥では穂数は増加し、m<sup>2</sup> 当たり籾数は3万5千粒程度を確保し、玄米重は60kg/aを越えた。なお出穂前の30日の穂肥でも倒伏は認められなかった。

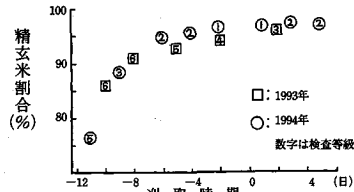
## 4) 刈取時期

低温年で成熟期が遅れた場合の刈り取りの早限を明らかにするために刈取時期試験を行った。

精玄米重歩合は成熟期間前6日から95%程度となり、それ以前では低下した。検査等級は成熟期前6日から良好となり、それ以前では低下した。しかしながら刈遅れによる品質低下はコシヒカリ、ヒノヒカリ、ユメヒカリにくらべると少なかった。精玄米重歩合・検査等級から総合的に判断すると、なつのとよりの収穫適期幅は成熟期前5日から成熟期後2日までの8日間であった。その判定基準は積算気温760~950℃、最長稈穂の稔実黄比粉割合70~90%である(データ略)。



第2図 穂肥時期と玄米重・籾数 (1994年)

注) ( ) 内は穂数 (本/m<sup>2</sup>)

第3図 刈取時期と精玄米割合・検査等級

注) 検査等級は1・1等上~5・2等中~9・3等下